

《編集後記》

■筆者は、約一ヶ月間の間、トルコ系地区を中心に調査をした。Fatih Akin の映画をきっかけに、トルコ系について調べ出したが、日本では資料が古く、少なかったことから、研究を続けることに限界を感じていた。しかし、クロイツベルクやノイケルンなどで、多くの親切なトルコ系の人々に助けていただき、さらにトルコ系の文化への関心が深まってしまった。ドイツ語もトルコ語も話せないことをいいことに、迷い込んだふりをしてモスクへ入って来た私にチャイをごちそうしてくれたおじさん達（一日にただチャイを5杯飲んだ日も！）や、一生懸命に道を教えてくれようとしてくれた人、工事中の店のお手洗いを貸してくれた人などとの出会いのおかげだ。

トルコ系だけでなく、おすすめのギャラリーまで連れて行ってくれたドイツ人のおじさんや、迷っていないのに駅まで送ってくれたセネガル系の人、別のモスクまで車で連れて行ってくれた、最後まで何系か不明だったおじさんなど、出会った人を挙げだしたら書ききれないほど、ベルリンでは毎日のように出会いがあり、多くの人が手を差し伸べてくれた。

彼らの優しさに触れ、この国に民族間の問題なんて存

在するのだろうかと思えたほどだ。もちろん、移民の集中地区はあるものの、それもベルリンの魅力であるかのように見えた。住んでみないとわからない差別や問題があるのだろうが、一ヶ月では計画性のなさのため、おおまかな印象でしか捉えられなかったこの街を、次回はもう少しつっこんで細かく調査を進めていきたい（その時までには少しでもドイツ語を話せるようになっておきたい…）。

そして、Ballhaus Naunynstrasse でインタビューに時間を割いていただいた、Osman Tok 氏、Tim Seyfi 氏、Sinan Akkus 氏に感謝しなければならない。映画監督や俳優の方々と、フランクにお話できたのは興奮するような経験だった。また、お手洗いで憧れの DJ Ipek ともお話することができた。日本で情報入手ができるトルコ系のアーティストのほぼ全員が、Ballhaus と関わりがあるようで、この劇場の発信力を感じた。最後に、今回ベルリンで調査する機会を与えて下さり、Ballhaus の存在についても教えて下さった藤野一夫先生に感謝したい。

〔伊藤〕

■皆の力を合わせて、ついに本報告書を完成した。初めての海外での共同生活から、帰国後の報告書の執筆まで、私にとって貴重な経験である。海外の（サバイバルな）生活のサポートも、報告書の編集も、皆の力が集まらないと完成できないだろう。とりわけ、ドイツ初日のスーツケースの未着事件や、報告書にある日本語の添削作業などは、藤野教授と院生たちに大変迷惑をかけてしまった。皆からのサポートのおかげで、様々な困難を乗り越

え、言葉で表すことができないぐらいの感謝の気持ちをずっと抱いている。ベルリンの滞在期間中に、毎日忙しくて充実な生活を暮らしていたが、神戸に戻った後も相変わらず修士論文と報告書を両方執筆していた。2011年8月以降の半年は、実にサバイバルな生活が続いてきたと言えよう。それにもかかわらず、修士論文と報告書を完成した今、その達成感は何よりも大きい。

〔陳、台湾にて〕

■本報告書の全体的な編集作業を担当した。公刊作業に関わるのはこれが2度目だが、いまだ不慣れな部分が多く、各方面にご迷惑をおかけした。とはいえ、厳しいタイムスケジュールにも関わらず本報告書の印刷・製本を引き受けて頂いた株式会社ルネックの歌房保彦氏と、藤野一夫教授をはじめとするプロジェクト・メンバーの献身により、当初の想定を凌ぐ大部の報告書が完成したことを嬉しく思う。なお、報告書という性格上、第2部ド

キュメントの執筆にあたっては見聞きしたことをできるだけ客観的に書くよう心掛けたが、別府での議論の中にもあるように、芸術を考える際は「私がどう思うか」が何より重要と考え、個人的な感想を正直に書いた部分が少しある。一人でも多くの方に、自らドイツへ赴いて、本報告書が述べていることを確かめてみようと思って頂くことができれば幸いである。〔寺田〕

■もし、意を決し、1人でベルリンに1ヶ月滞在していたら、同じような経験が出来ただろうか？出来なかったであろう。今度の研修の成果は、まず第一に藤野先生の幅広い人脈のお陰であり、さらに、彼らがそれぞれに私たちに仕事場や関心ある場所を紹介してくれたお陰である。そうでなければ、最先端のベルリン・アートシーンの舞台裏を目撃することは到底叶わなかった。先生と彼

の友人たちに、最大の感謝を申し上げたい。

本報告冊子の編集では、主に、学生フォーラム「混浴“学生”世界」の文字起こし・校正作業を担当した。多くの方がフォーラムで発言してくれていたのも、嬉しい悲鳴で、発言の掲載確認のやり取りは一朝一夕にはいかなかった。しかし、それらを通じて、本を発行することの重みと、いつか誰かの役に立つかもしれないという希

望を得た。度重なる連絡に我慢強く応じてくださった発言者の皆さまに、心からの感謝を送りたい。〔橋本〕

■9月1日から30日までの1ヶ月間、音楽団体のエデュケーション・プログラム(EP)に注目し、調査を行った。

「聴衆にとってクラシック音楽とはどういうものなのか」ということを真摯に考えているコーミッシュ・オーパー・ベルリン(KOB)のEPには感銘を受けた。そこで、研究ノートではドイツの芸術教育思想を述べ、KOBのオープン・デーの事例分析を試みたのである。

EPやアウトリーチ活動の研究を志した契機は、中学1年生から始めたトランペットとの「共同生活」の中にある。トランペットを通して「音楽が人生の支えになるのであれば、発展途上国の子供に音楽を捧げられる活動をしよう」と考えるようになり、音大へ進学した。音大時代、筆者が関わっている音楽団体が存続の危機になり「存続させるにはどうすればいいのか」と考えるようになって

た。加えて、音楽科教職免許を取得する過程で音楽の真なる部分を伝えることのできない現在の音楽教育の限界を感じた。そんな折に、「アウトリーチ活動」という言葉を知った。筆者にとって衝撃的なものがあり、それを研究しようと決意した。

筆者の力不足により、本報告書では研究的萌芽が見えるところまで辿りつくことができなかった。しかし、一通過点として、このようにゼミ生と共同執筆／編集ができたのは、大変貴重な体験であった。ゼミ生の皆に礼を申したい。また、コーミッシュ・オーパー・ベルリン演出助手の菅尾友氏、教育部門長のA.K.オストロップ氏にも感謝の気持ちを伝えたい。そして、文章を書くことが不慣れた筆者に対し、暖かく指導して下さった藤野一夫教授に厚く御礼を申し上げる。〔南田〕

■神戸大学国際文化学部の交換留学生としてドイツで1年間学ぶ機会を得、2011年夏にハンブルクに来てから早くも半年が経とうとしている。すべてが新しく目移りばかりしていたハンブルクの光景も、今や目に馴染んでしまった。その半年の間に、8月6日に初めて見たElbphilharmonieは外壁の工事はほぼ完了したが、その後、工事の中断があり、留学中の予定であった竣工時期はさらに延期されることになった。昨日(2012年1月17日)、Laeiszhalleにて、Elbphilharmonie Gespräch“が開催された。その場では、Elbphilharmonieの建築家の一人、Pierre de Meuron氏とGeneralintendantであるChristoph Leben-Seutter氏の話聞くことが出来たが、その対談後に行われたフロアからの質問コーナーでは、ポジティブなもの、ネガティブなもの両方が飛び交い、いずれの質問に対しても拍手が起きていた。招待客が多く当日券があまり売れていなかったこと、そして付け加えるならば、学生や若者が全く見受けられなかったのが気にかかったが、現在のハンブルクを象徴するような一場面であったことに間違いはないだろう。

まさに現在進行形で進んでいくプロジェクトを目の当たりにし、その奥深さを知れば知るほど更なる興味が湧く一方、分析・考察することの難しさなども痛感する毎日だ。今回の研究ノートも、分量の関係もあり、ハンブルクという都市やプロジェクトの背景、またElbphilharmonie Open Air当日の様子について断片的にし記述できず、結果として表面的な考察に終わってしまった。

唯一の学部生として参加させていただいた今回のプロジェクト。期間中、常にお世話になった院生の方々に、まずお礼を申し上げたい。また、Elbphilharmonie Open Air当日など調査中に「街の声」として話を伺い、また原稿執筆にあたり協力をお願いしたハンブルクの方々にもお礼を申し上げる。そして、ドイツの文化政策について幅広く詳しく教えて下さったヴォルフガング・シュナイダー教授をはじめ、貴重なお話をしてくださった諸先生方、そして、このプロジェクトだけでなく留学に際しても本当にお世話になった藤野教授に、改めて深い感謝の念を示したい。〔三宅、ハンブルクにて〕